様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０４１４５

研究課題名（和文）コンドーム使用時の羞恥感情の適応的機能とその制御によるコンドーム使用促進

研究課題名（英文）The adaptive function of embarrassment when using condoms and the promotion of using condoms by regulation of the embarrassment

研究代表者
樋口　匡貴（HIGUCHI, Masataka）

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：６０３５２０９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：コンドーム使用時の羞恥感情を適切に制御し，コンドーム使用を促進するための介入方法の開発を試みた。まず，コンドーム使用時に羞恥感情を表出することは，男女ともに様々なポジティブイメージをもたらすことが明らかになった。それを踏まえ，コンドーム使用そのものに対してポジティブイメージを付与するビデオ映像を作成し，その視聴による効果を検討した。その結果，少なくとも女性に対しては，インターネット経由でのビデオ視聴によってコンドーム使用の促進効果が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
性感染症の予防にとって，現実的かつ効果的な対策はコンドームの適切な使用である。しかしそれが様々な理由によって阻害されており，その中でも大きな阻害因の1つが羞恥感情である。本研究はインターネット経由で配信可能なビデオ映像を用いてコンドーム使用時の羞恥感情の制御を試みた研究であり，コンドーム使用の促進効果を確認することができた。広く配信可能な形での効果的な介入策が開発できた点において，現実的社会的な意義は大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：We attempted to develop an intervention method to appropriately control the embarrassment when using condoms and to promote the use of condoms. First of all, it was revealed that expressing embarrassment when using condoms brings various positive images to both men and women. Based on that, the video image which gives a positive image to condom use was created, and the effect of the video was examined. As a result, at least for women, viewing the video via the internet promoted their condom use.

研究分野：社会心理学，健康心理学

キーワード：コンドーム使用　羞恥感情　性感染症予防

１．研究開始当初の背景

（1）HIV 問題の深刻性と対策

HIV 感染の問題は、近年の日本にとって非常に重要な課題である。厚生労働省エイズ動向委員会報告によると、2013 年末までに報告された HIV 感染者および AIDS 患者の累計は 23,015 名であり、減少の傾向はまったく見られない。HIV および AIDS を完全に消失・治癒させる医・薬学的な手段は現時点においては存在せず、感染の予防こそが重要である。

HIV 感染予防にとって現実的かつ効果的な対策はコンドームの適切な使用に他ならず、性的接触が活発化する 20～30 歳代までに徹底させる必要がある。厚生労働省による「後天性免疫不全症候群に関する特定感染症予防指針」において青少年は、特別の配慮を必要とする個別施策層に位置づけられている。コンドームの使用は HIV のみならず、特に若年層を中心に増加しつつあるその他の性感染症（クラミジア、淋病、尖圭コンジローム等）の予防にとっても重要である。

HIV の感染経路は性的接触である場合が非常に多く、報告者数の 80%を超えている。中でも同性間性的接触による感染は HIV 感染者の 70.5%、AIDS 患者の 56.4%を占め、特に同性間性的接触に対する予防策が重要であることが認められる。現に厚生労働省におけるエイズ対策研究事業においては、MSM（men who have sex with men）を対象とした予防介入が中心的な課題になっている。

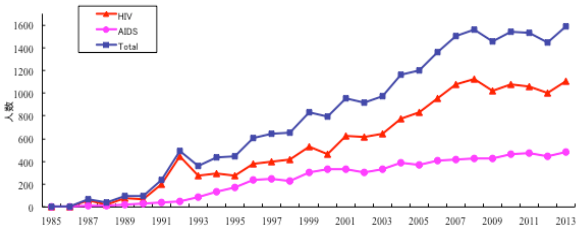

図１　HIV 感染者および AIDS 患者の年次推移

しかしながら本研究では、特に異性間性的接触におけるコンドーム使用に注目する。現状で異性間性的接触による感染は 17.5%を占めており、これは決して無視できる数値ではない。一方で相対的に重要度の高い同性間性的接触に比して人的・金銭的コストをかけられないことも事実である。そのため本研究課題では、低コストで実行可能な異性愛者むけのコンドーム使用促進のための介入プログラムの開発を目指す。現在の感染の状況は、HIV 感染に対する有効な予防介入プログラムの不足を裏付けており、本研究課題は疫学的にも学術的にも喫緊の研究課題である。

（2）コンドーム使用と羞恥感情

コンドーム使用に関する心理学的研究では、自己効力感や規範意識、HIV に関する知識など、コンドーム使用の様々な規定因が検討されてきた（Peterson & DiClemente, 2000: Handbook of HIV Prevention）。中でも近年注目を集めている重要な阻害要因が羞恥感情である。

羞恥感情(embarrassment)は、特にコンドームの購入および使用時に生じ、これらの行動を強く阻害することが指摘されてきた（e.g., Moore, et al., 2006, Psych., Health & Med.）。しかし過去の研究では、羞恥感情を低減させ購入や使用を促進させる有効な介入方法は開発されてこなかった。コンドームが必要な際に羞恥感情に阻害されずに自由に購入でき、自由に使用あるいは使用の依頼ができることは健康にとってきわめて重要な問題である。

（3）これまでの研究実施状況

申請者らは事前段階として、コンドーム使用時の羞恥感情とその認知的発生因が使用に及ぼす影響（樋口・中村，2010: 社心研）についての調査的検討を行った。この検討による知見に基づき、第 1 段階の検討として、羞恥感情を克服しコンドームを使用するための介入方法の開発およびその効果の検討（平成 25 年度科研費補助金）を行った。

これらの介入プログラムは、現在までの検討において一定の効果が確認されてはいるものの，完全に十分とはいえない。本研究では，コンドーム使用行動をより促進するための重要な要因として，コンドーム使用時における羞恥感情の機能に注目したい。

コンドーム使用を阻害する要因を網羅的に検討した Helweg-Larsen & Collins（1994, Health Psychology）は，コンドーム使用意図と有意に関連するのが（1）羞恥感情と（2）コンドーム使用者に対する評価であることを示した。またこの両者は非常に強く相関していることが明らかにされている。この研究から，コンドーム使用時に羞恥感情を示している者に対する評価がコンドーム使用を左右する重要な要因になっていることが伺える。

羞恥感情の表出に対する評価については，近年の社会心理学的・進化心理学的な研究においても注目されている。羞恥感情の表出は、表出者の向社会的評価を高め、他者からの信頼をより獲得することが明らかになっている（Feinberg, et al., 2012, JPSP）。これらの研究成果を考慮すると、コンドームを使用する際に恥ずかしがるのは、そこに何らかのメリットが存在しているからに他ならないと考えることができる。この点をふまえると、このメリットを考慮せずに羞恥感情を低減させようとしても本質的には意味のないことになり、コンドームの使用促進が十分に達成できないことになってしまう。

２．研究の目的

本研究課題は、申請者がこれまで行ってきた研究をさらに発展させたものである。すなわち最終的な目的はコンドームの使用を促進させることに他ならない。この目的にとって重大な阻害因となる羞恥感情に注目し、羞恥感情を低減あるいは適切に制御することでコンドームの購入および使用の促進を目指す。

本研究課題の具体的な目的は以下 3 点であった。①コンドーム使用時の羞恥感情による機能を明らかにする、②コンドーム使用時の羞恥感情による機能を実験的に操作した場合の羞恥感情およびコンドーム使用に及ぼす影響を検討する，③羞恥感情による機能を制御するための介入プログラムの作成と効果を検討する。

３．研究の方法

（1）研究 1：コンドーム使用時の羞恥感情表出の機能の検討

コンドーム使用時には羞恥感情が強く生起し，それがコンドーム使用を強く阻害することが指摘されている。したがってその羞恥感情の抑制が適切なコンドーム使用にとっては重要なことである。しかしながらそれは簡単ではない。なぜなら羞恥感情を感じることには何らかのメリットがあると考えられるからである。そこで研究 1 では，羞恥感情による適応的社会的機能を明らかにすることを目的とした。

男女各 50 名の成人（20～25 歳）を対象に調査を行い，セックスの際にコンドームを使用している人物のイメージの測定を試みた。コンドームを堂々と使用している男性あるいは女性、コンドームを恥ずかしそうに使用している男性あるいは女性についてそのイメージを自由に記述させ、さらにそのイメージについてネガティブ（1 点）からポジティブ（7 点）の次元上での得点化を求めた。

（2）研究 2：コンドーム使用時の羞恥感情の機能の制御に関する検討

研究 1 の結果を踏まえると，コンドーム使用時の羞恥感情によって獲得できるメリットの代替を考える必要があった。そのため研究 2 では研究 1 の結果を踏まえ，どのようなコンドーム使用方法（あるいは使用依頼方法）を格好がいいと感じるか，誠実だと感じるか，素敵だと感じるか，魅力的だと感じるかのそれぞれについて，コンドーム使用経験のある男女各 80 名（20～25 歳）を対象に調査を行った。

（3）研究 3：コンドーム使用時の羞恥感情の制御を目指した介入プログラムの効果研究

研究 2 までの結果を踏まえ，30 秒間のビデオ映像を作成した。このビデオでは男性および女性が「コンドームを使う人はかっこいいと思います」「コンドームを使おうって伝えてくれる人はかっこいいと思います」「コンドームを使う人は信頼できます」「コンドームを使おうって伝えてくれる人は，自分たちのことを真剣に考えてくれていると思います」といったメッセージを含むものであり，これらのメッセージの後に「コンドームを使いましょう」という呼びかけがあった。

452 名の「コンドームを使っているが，常に使っているわけではない」成人男女を対象にしたインターネット経由での無作為化比較試験によって，本ビデオ映像の効果を検討した。800 名を対象とした事前測定の後にランダムに割り付けた半数の参加者に対して上記ビデオを視聴させ（介入群），もう半数には単純に「コンドームを使いましょう」という呼びかけだけのビデオを視聴させた（待機群）。その 10 日後に事後測定を行った。

４．研究成果

（1）研究 1：コンドーム使用時の羞恥感情の適応的機能の検討

コンドームを堂々と使用している男性あるいは女性，コンドームを恥ずかしそうに使用している男性あるいは女性のそれぞれの対象に対してネガティブ・ポジティブ両側面のイメージが付与されたが、その内容は対象に応じて大きく異なっていた（堂々−女性には「慣れてそう」「下品」vs. 堂々−男性には「誠実」「当たり前」、恥ずかしそう−女性には「可愛らしい」「純情」vs. 恥ずかしそう−男性には「気弱」「不慣れ」など）。さらにその得点についても、各対象で違いが見られ、コンドームを堂々と使用する女性に対するイメージの得点（4.25）が堂々と使用する男性（4.86）や恥ずかしそうに使用する男性（4.57）、恥ずかしそうに使用する女性（4.84）よりも低いものとなっていた。これらの結果から、コンドーム使用時における羞恥表出のジェンダー差が重要なものであることが示された。

（2）研究 2：コンドーム使用時の羞恥感情の機能の制御に関する検討

自由記述によって得られた回答を分析した結果，コンドーム使用の格好の良さや誠実さと特定の使用方法や使用依頼方法との明確な関係は見出されなかった。しかし一方で，コンドーム使用が「かっこいい」「信頼できる」「自分たちのことを真剣に考えてくれている」といったポジティブなイメージが存在することは確認された。

（3）研究 3：コンドーム使用時の羞恥感情の制御を目指した介入プログラムの効果研究

事後測定までの回答を行った 452 名を対象にしたデータ解析の結果，コンドーム使用時の羞恥感情およびコンドーム使用の自己効力感については介入の効果が見られなかった。しかし，女性の介入群における直近 10 日間でのコンドーム使用率については有意な増加効果が認められた（事前 58.10% vs. 介入後 72.97%，効果量 Cohen's d = .41）。

すなわち，本研究において構成したビデオ映像が女性に関しては一定のコンドーム使用促進効果を持つことが示された。

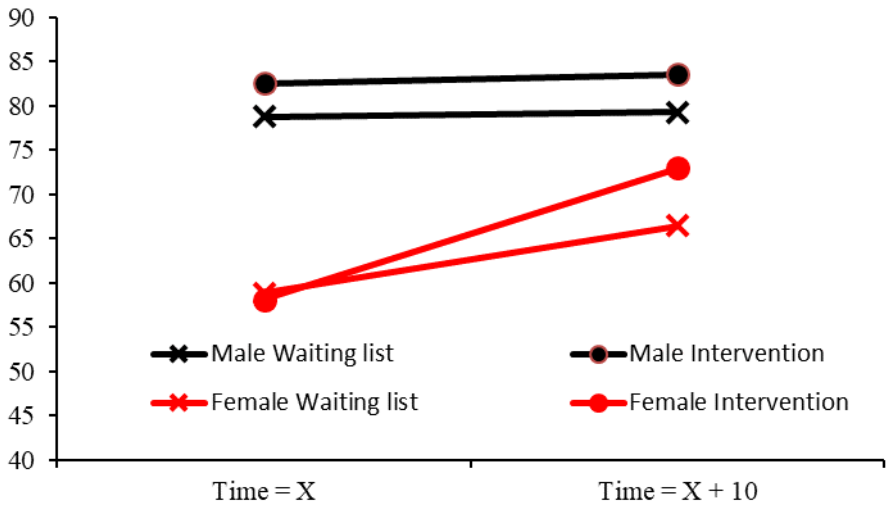

図 2 各条件における直近 10 日間でのコンドーム使用率

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 2 件）

（1） 樋口匡貴・中村菜々子（2018）．ビデオ視聴法によるコンドーム購入インターネットトレーニングの効果 日本エイズ学会誌，20，146-154．（査読有）
https://jaids.jp/pdf/2018/20182002/20182002046054.pdf

（2） 福田哲也・樋口匡貴（2016）．羞恥場面における観察者の行動が羞恥感情に及ぼす影響―公恥状況における影響およびその影響プロセスの検討 感情心理学研究，23，116-122．（査読有）
https://doi.org/10.4092/jsre.23.3_116

〔学会発表〕（計 2 件）

（1） Higuchi, M. & Nakamura, N. (2016). Effects of Internet-based training for reducing embarrassment when using condoms. 31st International Congress of Psychology.

（2） Higuchi, M. & Nakamura, N. (2015). Effects of Internet-based Video-feedback training for reducing embarrassment when purchasing condoms: One year follow-up. The 14th European Congress of Psychology.

〔図書〕（計 1 件）

（1） 樋口匡貴（2016）．社会的感情と健康行動 大竹恵子（編著）「保健と健康の心理学」Pp. 94-119.

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(2)研究協力者
研究協力者氏名：中村 菜々子
ローマ字氏名：NAKAMURA, Nanako

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。